

理解されにくい病気について

隠岐の島町立西郷南中学校 二年 渡部梨樺

私は、喘息という病気をもっています。みなさんは「喘息」という言葉を聞いたことがありますか？喘息は「気管支喘息」とも呼ばれ、気管支に炎症が起こって、空気の通り道が狭くなってしまう病気です。風邪でもないのに咳が出たり、「ゼーゼー」「ヒューヒュー」と音がしたり、息苦しさや胸がしめつけられるような痛みがあることもあります。

でも、見た目では全くわかりません。熱があるわけでもなく、倒れるわけでもない。ただ咳をしているようにしか見えないため、病気だと気づいてもらえないのです。

喘息という言葉を知っている人は多いのに、どれほどつらい病気かを理解している人は少ないと、私は日々感じています。

特に、私にとって忘れられないのは、数年前の新型コロナウイルスの流行時期です。

ある日、私は母とスーパーへ買い物に行きました。マスクもしていましたが、なるべく人がいない時間を選びました。それでも店の中で咳が出てしまい、止まらなくなりました。すると、周りの人たちがこちらを見て、

「うわっ、コロナじゃん。」

「コロナなら店に入らないでほしいよね。」

と、小さな声で話しているのが聞こえてきました。そのとき私は、

「違います、これは喘息なんです！」

と、言いたくても言えませんでした。とても悔しかったし、悲しかったです。コロナが流行していて、誰もが不安だったのはわかります。でも、ただの喘息の咳なのに、何の確認もなく「コロナだ」と決めつけられるのは、本当につらいことでした。

しかもそれは、一度だけではありませんでした。その後も何度か、咳が出るたびに、周りの視線を感じました。

「咳出てるじゃん。」

「あそこには近寄らないようにしましょう。」

そんな言葉を言われたこともあります。私はなるべく咳が出ないようにと息をとめたり、喉を押さえたりして我慢しました。でも、どれだけ我慢しても、咳は出てしまうのです。

ある日、どうしても咳が止まらない私に、小学生の男の子が、こう言ったのです。

「苦しいなら、咳したら？」

私はびっくりしました。責められると思っていたからです。けれどその言葉は、私の心を軽くしてくれました。「咳＝悪いこと」と思われる中で、ただ一人、私のことを心配してくれた男の子の言葉に、とても救われました。何気ない一言でも、理解してくれる人がいるだけで、気持ちは大きく変わるんだと知りました。

私の経験は、私だけでなく、多くの人を経験している差別の一例です。コロナウイルスの感染を恐れる気持ちはわかりますが、その恐れが差別や偏見になってしまうのは、と

でも悲しいことです。病気を持つ人や、見た目ではわからないけれど苦しんでいる人を、もっと理解し、助け合える社会になればよいと思います。

私が出会ったあの男の子のように、誰かを思いやれる人が一人でも増えたら、社会はきっと優しくなれるはずですよ。

私は、見えない苦しさに気づける人になりたい。そして、そんな人がたくさんいる社会で生きていきたいと思っています。